



# 日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第8号 / Boletín Núm.8

2004年10月25日 / 25 de octubre de 2004

## 事務局

〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町

熊張茨ケ廻間 1522-3

愛知県立大学外国語学部気付

## 編集局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1

立命館大学びわこ・くさつキャンパス

山崎信三研究室 Tel:077-561-4698

## 巻頭言

原 誠(東京外国語大学・拓殖大学名誉教授)

### 「日本イスパニヤ学会創立 50 周年を祝って」

1955 年 12 月初旬、当時北区西ヶ原にあった東京外国語大学の 4 年生であった私は会田由ゼミの一員ということで、同級の故栗原人雄君とともに、寒風吹きすさぶ 1 号館の入口に机と椅子を出して、日本イスパニヤ学会の創立大会の受付を務めていた。当日のプログラムは、あの懐かしい 1302 番教室 一もちろん暖房などない— で、午前中は役員の選出、会則の審議、昼は健チャン食堂でカレーライスの会食、午後は町田、大島、会田 3 氏の研究発表、というものであった。あれから半世紀が経過したとは正に信じられないくらいである。怖いもの知らずで、血気盛んな青年であった私も、今や白髪がまばらにしか生えていない老翁になってしまった。学会発足当時は研究発表希望者も『イスパニカ』への投稿者も少なく、平均すると研究発表は 3 つぐらい、研究発表者の寡少を気にする理事会は研究発表後の質疑応答を御法度にした。『イスパニカ』への投稿はもちろんフリーパス。会員はその大半を東京外語の卒業生が占めていたので、他大学の出身者からはまるで東京外語の出身者の同窓会みたいだと悪口を言われたが、私としては返す言葉がなかった。こういう雰囲気であったので、私を含めて一部の若手が別の学会を作ろうとしたことがあった。こういう分派行動が回避されたのは、ひとえにスペイン語の大学院の新設と出口厚実氏の首唱による関西スペイン語談話会発足のおかげである。それから少し遅れて東京スペイン語学研究会も活動を始めた (1975 年)。従ってスペイン語学に関する限り、このような大学院新設と月例の研究会の発足と一部の研究者の国際会議での活躍により、層の薄さは否めないにしても、一応の学問的水準には達したと言うことができよう。スペイン語文学の研究も語学よりはいささか遅れたにせよ、かなりのレヴェルにまで達していると考えられる。

そこで外国語・外国文化を研究対象としている我々に共通の大問題が持ち上がる。それは、スペイン語の文法はスペイン語を母語としている人にしか書けないのか、ドン・キホーテはスペイン人にしか分からないのか、という問題である。この問いには私は自信を持って否と答える。つまりスペイン語文法を書こうとする外国人にはスペイン語文法は書けるのである。多かれ少なかれ批判はあろうが、オランダのボウツマ、デンマークのイエス

ペルセンの英文法はその例である。日本人では中島文雄の『英文法の体系』(1961)はどこに出しても恥ずかしくない立派なものである。要するに、私が言いたいのは、こういった場合に、分野によっては、母語話者の研究者に勝るとも劣らない業績を外国人研究者でも挙げられるということである。そういう意味で母語話者の研究者の業績を絶対視するのは良いことではない。この意識が強すぎ、しかもそれを母語話者の研究者に感じ取られてしまった私はすっかりいじけて国際的な活動を止めてしまった。しかし日本の若いイスパニスタはこんなことではいけない。スペイン語を母語とする研究者何するものぞという気概を持って国際舞台に出て行ってほしい。ところでそのいじけてしまった私であるが、今までに27本の論説を『イスパニカ』に書かせていただいた。Le debo a la AJH todo lo que soy. である。これでは学会に足を向けて寝るわけにはいかない。しかし他方で私は71歳になった。老害に思いを致して身を引く時である。ここで退会することは学会に対して恩知らずということになるのであろうか。私はそうは思わない。今後のイスパニヤ学会の更なる発展を願って止まない。

## ヨーロッパ・スペイン語教授者連盟国際学会報告

有本 紀明 (中京大学)

平成16年3月28日から4月1日まで、中京大学名古屋学舎センタービルの8階教室およびヤマテホールにおいて、国籍にすればスペイン、ドイツ、ロシア、イスラエル、韓国、台湾、グアテマラなど20カ国60名、日本から延べ20名の参加を得て、「ヨーロッパ・スペイン語教授者連盟」(Asociación Europea de Profesores de Español, 以下AEPE)の国際会議が開催された。

AEPEは1967年スペインのメネンデス・ペラーヨ国際大学で創設された非政治的・非営利的性格を持つ専門者の団体であり、イスパニアの言語と文化を普及させ、多様な国々におけるスペイン語教授者間の職業的絆を強めることを目的とする。今やAEPEは36カ国、ヨーロッパ、アジア、アメリカの両大陸、アフリカにまたがる会員を擁し、毎年スペインの各地で大会を開催している。本年度は7月25日から30日までセゴビアのSEK大学(Universidad de San Estanislao de Kosca)で開かれた。

AEPEはスペインでの年次大会に加え、世界の他の国々で、随時、国際学会(Coloquio)を組織する。最近ではアメリカのコロラド州立大学(2000年)、ロシアのモスクワ国際関係大学(2002年)で行われた。

学会期間中、初日のスペイン・リオハ大学の中世言語学の権威G・トゥルサ博士の基調講演を皮切りに、駐ベトナムスペイン大使G・オルティス氏と南山大学宗教文化研究所のW・ヘイシグ博士の特別講演と23の研究発表の場が持たれた。

今回の国際学会のテーマは「日本とイスパニア世界：文化、文学そして言語の環」というものであったが、研究発表はイスパニア世界における言語教育、文学、文化に関するもののほか、日本におけるスペイン語教育の諸問題、さらに、日本との比較研究という切り口による議論が展開された。

遠来の客のために、日本紹介の機会を設け、中京大学、名古屋大学の教員による文学、地理、歴史、哲学のミニ講演会、そして市当局の協力のもと、名古屋市と国際博覧会の展望についてのセッションを持った。さらには本学の能楽堂教室を舞台に和泉流狂言の鑑賞

会、場所を移して松尾流の茶会を催した。また学会の合間を縫い、貸切りバスで名古屋城、徳川美術館、鶴舞公園、犬山城、明治村などを訪問した。

また、学会終了後の一週間にわたってオブショナル・ツアーを実施した。参加者約30名は、大阪、奈良、京都、姫路、広島、宮島、神戸、東京の観光旅行を楽しんだ。学会の責任者ピラル・G・エスクデロ（中京大学）が同行した。

7月のセゴビアの年次大会に間に合わせるべくスペインで刊行した「論叢」が、この学会の締め括りとするなら、準備から数えて1年近く、気ぜわしい、特に後半は恐ろしくも忙しい日々であった。多くのボランティアの方々のご協力を得て、なんとか無事終了することが出来た。

この場を借り、グラシアン基金、スペイン大使館、大幸財団、名古屋市総務局、名古屋観光コンベンションビューロー、天理教名古屋大教会、リオハ州政府そして中京大学に心からの感謝の意を捧げたい。

なお学会また「論叢」についてのお問い合わせは、tarimoto@lets.chukyo-u.ac.jp まで。

## PROGRAMA DEL XVI CONGRESO DE CANELA (Confederación Académica Nipona-Española-Latinoamericana)

Fecha : Sábado 15 y domingo 16 de mayo de 2004

Lugar : Universidad Tenri. Campus de Somanouchi (Nara)

### SÁBADO 15 DE MAYO

11.30~12.30 Reunión de la Junta Directiva

12.30~13.00 Inscripción / 13.00~13.45 Asamblea General

14.00~15.15 Conferencia Plenaria

- Hiroto Ueda (Universidad Nacional de Tokio) : *"Enseñanza e investigación de la lengua española : nuevas propuestas para el ámbito universitario"*

15.30~18.00 Reunión por grupos

Grupo A. Literatura

- Cecilia Silva (Universidad de Sendai. Japón) : *"Análisis de la obra de Rodolfo Wals"*

Grupo B. Pensamiento e Historia

- Oscar Álvarez (Universidad del País Vasco. España) : *"Emigraciones de Europa a América en los siglos XIX y XX: su importancia en la formación de las nuevas colectividades nacionales"*

Grupo C. Metodología de la enseñanza del Español Lengua Extranjera

- Masami Ogawa (Universidad Doshisa. Japón) : *"La habilidad de lectura de los estudiantes japoneses y el problema de los calcos lingüísticos"*

- Raquel Pinilla (Universidad Rey Juan Calros. Madrid) : *"Relaciones entre Léxico y Gamática en el aprendizaje de E/LE"*

18.30~20.30 Banquete "Cena de Amistad"

### DOMINGO 16 DE MAYO

09.30~11.00 Conferencia Plenaria

- Santiago de Pablo (Universidad de País Vasco. España) : *"Memoria e imagen de la*

### *Guerra Civil en el cine español de la democracia*

11.00~12.00 Reunión por grupos

#### Grupo A. Literatura

- Paula Letelier (Universidad de Kansai Gaidai. Japón) : *"La presencia de lo luminoso en los poemas de Gonzalo Rojas"*

#### Grupo B. Pensamiento e Historia

- Keishi Yasuda (Universidad de Kioto Gaidai. Japón) : *"El itinerario de los brigadistas estadounidenses en la guerra civil española: el caso de Harry Fisher"*

#### Grupo C. Metodología de la enseñanza del Español Lengua Extranjera

- Margarita Nakagawa (Universidad Nacional de Osaka. Japón) : *"Técnicas remediales para el uso del artículo en español por los estudiantes japoneses"*

12.00~12.45 Clausura del Congreso e informes por grupos

Este Congreso se celebró con subvención(año 2003) del Programa "Baltasar Gracián" del Ministerio de Educación, Cultura y Deporte de España.

### Informe del Seminario de Corpus del Español en la Universidad Sofía

Antonio Ruiz Tinoco (Universidad Sofía)

Los pasados días 11 al 13 de junio de 2004, el profesor Mark Davies, del Departamento de Lingüística y Lengua Inglesa de la Universidad Brigham Young de Estados Unidos, impartió en el Centro de Estudios Hispánicos de la Universidad Sofía un seminario de lingüística del corpus con el título de *El uso del Corpus del Español y otros corpus en la investigación de la variación actual y los cambios históricos* con la asistencia de más de cuarenta estudiantes de postgrado y profesores. El Prof. Davies es un reconocido especialista de lingüística del corpus y entre sus intereses se encuentra la investigación de la variación histórica y sintáctica del español, portugués e inglés.

El seminario, de siete intensas horas de duración, constó de una introducción teórica a la lingüística del corpus y se centró en aspectos prácticos de diversas técnicas de investigación mediante el uso de su marcocropus que se puede consultar libremente en su página web(<http://www.corpusdelespanol.org>).

Las técnicas de la lingüística del corpus se están valorando cada vez más como herramientas imprescindibles de investigación del lenguaje, de enseñanza, investigación de estilo, ayudas a la traducción, etc. y no siempre son necesarios conocimientos especializados de este tema ni de computación por lo que creemos que ha sido de una gran acogida por los asistentes en general.

Con motivo del seminario se ha editado el número 11 de la Serie Cultura Hispánica del Centro de Estudios Hispánicos de la Universidad Sofía que contiene el material usado en el Seminario y que se puede obtener gratuitamente en la Secretaría del Centro.

La realización de este Seminario ha sido subvencionada por el Programa "Baltasar Gracián" del Ministerio de Cultura de España.

## 京都セルバンテス懇話会・今治大会に参加して

米谷 勲（専特許事務所）

第七回となる本年の京都セルバンテス懇話会・今治大会は、当地の日西文化協会 TORA との共催で「スペインの夕べ」と銘打たれ、七月三日に行われた。市の中心街にある会場の外では梅雨の最中とは思えない青い空とうだるような暑さの下、翌週に投票日を控えた参院選の遊説カーが各候補者や政党の名を連呼しながらひっきりなしに通る。そのような中、「夕べ」というにはやや早い時刻、主催者等の挨拶に続き、第一部講演会が始まった。

まず「ラ・マンチャのキホーテと移牧羊群」という演題を掲げた五十嵐一成氏（札幌大）が登壇。歴史資料として『ドン・キホーテ』を利用・解析することを標榜する氏はその前編第十八章における二つの羊の大群に焦点をあて、これに主人公主従が遭遇した日や場所を特定し、二つの大群は一方が大移牧の群、他方がこれまで等閑視されてきた小移牧のそれであろうと結論づける。

続いて懇話会の講演では初お目見えの安藤真次郎氏（龍谷大）。当日のテーマは「ルイス・ビーベスのレトリック論」。十五世紀末バレンシアに生まれた人文主義者ビーベスの波乱の人生を当時のスペインや渡り歩いた周辺の国の歴史を織り交ぜながら辿り、提唱したレトリック教育論に言及する。背筋を伸ばし、一語一語丁寧に話す氏の講演には初登場らしい爽やかさが感じられた。

第一部講演会の掉尾を飾ったのは、スペイン料理研究家の渡辺万里氏による「スペインにおける豚肉食について」。地中海型と内陸型に大別されるスペイン料理を概観し、内陸型の中心的食材である豚肉のなかでも最高品種イベリコ種の起源・飼育方法、さらにはその腿肉が何故に美味しいハモンとなるのか等について、いつもの流れるような口調で氏の世界へ誘ってくれた。

第二部は、元駐スペイン大使の坂本重太郎氏による講演「スペイン事情あれこれ」から。在任中に訪問した国は百に近いという氏が外交官生活で痛感したことは「世界共通の常識はない」であり、それを裏付ける様々な地域のご様のお国柄をユーモアたっぷりに挙げていく。そして、十七世紀初めスペインを訪問し、そのまま彼の地に残った日本人の末裔でハボン姓を名のる人達を集め、セビリアでパーティを開催したときのエピソードで締めくくった。

続く演目は、日西文化協会 TORA がマドリッドで毎年開いている日本語弁論大会の今年度優勝者によるスピーチ披露。優勝した際の作品を再現してくれたもので、流暢な日本語や構成力に驚かされたことは、会場からの質問が最も多かったことが物語っている。

第二部のトリは柴田杏里氏によるギター演奏。音楽について語る筆を持たないのが残念であるが、マドリッド王立音楽院を首席で卒業、巨匠イェペスらに師事、数々の国際コンクールで優勝という輝かしい経歴を紹介し、本大会に出席できなかった方々の不幸に同情しつつ、報告に代えたい。

かくして「スペインの夕べ」は当地のランドマーク、今治国際ホテルへ場所を変え、懇

親会へ移っていった。

セルバンテス懇話会は京都をふりだしに、鹿児島、天理、札幌、名古屋、そして昨年の名護とセルバンテスよろしく遍歴してきた。この遍歴がどの程度筆者を賢くしたかについては覚束かないが、これまで同様、今治もまた当方の馴染みの地になったことだけは確かである。

## 第一回アジア・太平洋地域スペイン語教師研究集会

上田 博人（東京大学）

2004年9月8-9日にフィリピンのマニラでセルバンテス協会（Instituto Cervantes）が開催した「第一回アジア・太平洋地域スペイン語教師研究集会」（Primer Encuentro de Profesores de Español de Asia-Pacífico）に参加しました。地域が限られているので参加者はそれほど多くないだろうと予想したのですが、ウェブサイトやメールで連絡を取り、実にアジアや太平洋の国々のスペイン語の教師が150人以上も集まりました。ネイティブとノン・ネイティブの参加者は発表、質疑応答やコーヒープレイクの間で常にスペイン語を使っていたので、あたかもスペイン語圏にいるような錯覚に陥り、会場の外でも街の人にスペイン語で話してしまうことがありました。

わずか二日間のプログラムは次のようにぎっしり詰まっていました。

Día 8. Conferencia a cargo de J.Urrutia : “Nuestra defensa de la lengua”; A.Reguillo : “El Instituto Cervantes en Manila”; M.Fernández-Conde, R.Martín y S.Martínez : “Las Aulas Cervantes en el Sudeste Asiático”; A.Yagüe : “La formación del profesorado de ELE desde la Consejería de Educación en Australia y Nueva Zelanda”; E.Kwon : “El español en Corea”; Y.Juneshik : “Los centros asociados al Instituto Cervantes”; M.J.Arjona y F.Mancebo : “Lectorados de la Agencia Española de Cooperación Internacional”; E.Bautista : “La enseñanza del español en Filipinas”; B.Álvarez : “La disponibilidad de recursos y las nuevas tecnologías”; M.Sánchez : “El papel de la literatura en la enseñanza del español”; N.Arriaga : “La situación del español y su enseñanza en China”; Ch.Fuliang : “¿Qué estudian los alumnos de español en China?”; M.Vázquez, R.Blasco y A.Garralda : “La situación del español y su enseñanza en Hong-Kong”.

Día 9. J.M.Fons : “El papel de la cultura en la enseñanza del español”; R.Prado : “El programa de Cooperación Cultural entre Ministerio de Cultura español y las universidades filipinas”; A.Martínez : “La situación y enseñanza en Australia”; F.Lucio : “Tres experiencias didácticas de la Universidad de Dhaka”; Y.Sil Jeon y A.Muñoz : “La enseñanza del español en Tailandia”; M.Fuentes y V.Venkataraman : “El Marco Común Europeo en el contexto sociocultural de la India”; R.Saxena y E.González de Lucas : “Contextos y libros de texto en la enseñanza de ELE en la India”; H.Ueda y B.Astigueta : “Pruebas y tareas en la enseñanza de ELE”; C.N.Silva : “Actividades desde la perspectiva de la zona de desarrollo próximo”; M.P.Letelier : “Diferencias entre ELE y E2aL”; H.Lim : “La estrategia de la enseñanza del español en Corea”; A.Cañas : “Uso de la plataforma Web CT”; M.Rubio Lastra : “Trabajar con

los referentes personales de la clase de ELE”; D.Peí : “Aula virtual de Tamkang”; J.M.Blanco : “Valor distintivo y didáctico del tono silábico en español y en chino”.

多くの発表でパソコンと連動したパネルのスクリーンが次々と展開され、画像やビデオによって各地のスペイン語教育の実情がよくわかりました。台湾、香港、フィリピン、日本（北陸）など、アジアの各地でマルチメディアやウェブサイトなどの情報技術の利用が盛んであることが特記されると思います。

閉会式の前に Universidad de Murcia のスペイン演劇の専門家 César Oliva 氏による “Creación escénica y sociedad en el teatro español actual” の講演がありました。マニラ湾に面した窓から南シナ海に落ちる太陽が見え、ハードスケジュールの疲れで沈滞しつつあった会場から歓声が漏れて聞こえました。主催者によれば、この集会の内容は印刷物とインターネット上で発表されるそうです。（この報告は『NHK ラジオスペイン語講座』12月号に発表したものと重複する部分があります。）

## 第1回各国イスパニア学会会長会議報告

堀田 英夫（会長兼代表理事）

去る7月19日から24日までメキシコ・モンテレー工科大学における、国際イスパニア学会（Asociación Internacional de Hispanistas. 以下 AIH と略記）第15回大会にあわせ、第1回各国イスパニア学会会長会議（Primer Encuentro Internacinal de Presidentes de las Asociaciones de Hispanistas）が開催され、ドイツ、ベネルクス、ブラジル、カナダ、韓国、エジプト、アメリカ合衆国、フランス、ギリシャ、インド、イタリア、日本、ノルウェー、ポーランド、イギリス、スイス、アルゼンチンの学会会長（あるいは代表）が参加しました。日本イスパニア学会として堀田が出席しました。各国学会の現在と将来というテーマでそれぞれ報告・議論し、AIHのAurora Egido 会長の参加のもと以下の結論を得ました。

- 1) AIHのウェブサイト (<http://www.dartmouth.edu/~aih/>) に各国学会の紹介や情報を掲載する。
- 2) Nuevo Hispanismo (Editorial Iberoamericana) という会報を発行し、各国学会大会や研究計画を掲載し各学会会員向けに広報する。
- 3) AIHが形式等について仲介をとり、各国学会が、la Biblioteca Virtual Cervantes に文献情報を送付し、登録する。
- 4) 新興の学会を育成するため、AIHに、スペイン語学文学研究や学会の重要性を関係諸機関に喚起する方法の検討、学生・研究者交流の促進支援、当該国における奨学金やセルバンテス協会設置等への支援を要請する。
- 5) 今回会議の成果を確実なものとするため、できるだけ早い時期、できれば来年に次回会議を開催する。

以上です。

この会議の各国報告書と結論は、AIHのActasとセルバンテス協会のウェブサイトに掲載される予定です。

## 2004 年度第 1 回理事会

日時：2004 年 6 月 6 日（日）13:00~16:15

場所：モンブランホテル（名古屋駅前）第 2 会議室

### 審議事項

- 0) 前回議事録（2003.10.25）を確認。その【報告事項】および【審議事項】欄に見られる若干の文言の誤植を訂正の上、承認。また、今後の総会議事録作成が提案された。
- 1) 会長兼代表理事の選出：堀田英夫
- 2) 役員、委員の選出
  - (1) 副会長：Antonio Ruiz Tinoco
  - (2) 会計委員：角田哲康
  - (3) 庶務委員：糸魚川美樹、（他 1 名の選出は会長に一任）
  - (4) 学会誌『HISPÁNICA』編集委員会：委員長：田尻陽一  
語学（2 名）：木村琢也、西川喬      文学（2 名）：田尻陽一、斉藤文子  
文化（2 名）：柳沼孝一郎、大高保二郎
  - (5) 広報委員（会報）：山崎信三
  - (6) 広報委員（HP）：堀田英夫
- 3) 2004 年度、第 50 回大会について
  - (1) 基調講演者として予定されていた D. Víctor García de la Concha 氏と未だ連絡が取れていない状況や、開催予定日・会場校（南山大学）が、日本スペイン協会スペイン語検定試験のそれと重なることなどが懸念され、当初案の講演と日程等は一旦白紙に戻し、至急再検討・再調整に入ることが決定。
  - (2) 「50 回大会記念出版物」、「他学会との連携」、「『イスパニカ』の CD-ROM 化」、等々に関する質疑応答・意見交換。
- 4) 『HISPÁNICA』について  
第 48 号原稿応募状況報告、バックナンバー残部の保管・販売・寄贈・その他、編集作業補助とアルバイト代、etc.
- 5) 会報第 8 号発行と、HP（<http://www.soc.nii.ac.jp/ajh>）更新について
- 6) 第 1 回イスパニア学会会長国際会議＝第 15 回国際イスパニア学会（2004.7.19~24、メキシコ・モンテレー工科大学）への参加承認。
- 7) 会員名簿（住所録）作成について

### 報告事項

- 1) 2002 年度会計報告、2004 年度会計案（2003 年 10 月 25 日総会了承）の確認
- 2) 日本学術会議第 19 期登録学術研究団体の変更届提出について
- 3) 地域研究学会連絡協議会への参加（前年度総会承認）確認
- 4) 理事会メーリングリスト確認
- 5) その他



## 2004 年度第 2 回理事会

日時：2004 年 10 月 3 日（日）13:00~16:20

場所：愛知県中小企業センター西館 3 階「愛知県立大学・看護大学サテライトキャンパス」

### 審議事項・報告事項

- 0) 前回議事録（2004.6.6）確認 / 入会の承認
- 1) 第 50 回大会（学会創立 50 周年記念大会）について  
大会プログラム最終案 / 基調講演者(D.Luis Goytisolo 氏)日程 / 研究発表司会者決定 / 案内同封文書 / その他
- 2) 学会誌『HISPÁNICA』N° 1(1956) - N° 47(2003)CD-ROM 化について  
著作権問題 / 著作権規程案 / 配布方法 / 寄贈先 / その他
- 3) 学会誌『HISPÁNICA』N° 48 号について  
掲載内容追加項目 / 作成 / 発送委託先 / 旧号を欠号埋め優先し図書館に寄贈する。
- 4) 広報  
会報第 8 号 / HP / 会員メーリングリスト
- 5) 総会議案  
学会事務局変更 / その他
- 6) 学会事務センター破産への対応  
会員（+定期購読者）データ / 会計帳簿 / 学会誌旧号 / 郵便振替口座開設 / その他
- 7) その他

### 【自著紹介】

『聖書は動物をどう訳してきたか』（キリスト新聞社、2004）

水谷 顕一・水谷 惟紗久共著

聖書にはさまざまな動物が登場する。聖書のなかに登場する動物名は版によって多少の違いがあるが、旧約の部では 185 種類、新約の部では 45 種類の動物名が見られる。とりわけ、聖書の前半部にあたる旧約にはいろいろな動物が顕れ、古代人との多彩で、生き生きとした関わりをうかがい知ることができる。しかし、ヘブル語（旧約）、アラム語（旧約）、ギリシア語（新約）で書かれた動物名を他の言語に翻訳する場合、「それが何を指すのか」という問題が発生する。動物の生存圏の違い、時代の変遷に伴う生態系の変化、さらには、聖書が世界中の殆ど全ての言語に翻訳されていることにもよろうが、一つの原因にたいして異なる動物名が当てられることが多いのに気づく。例えば、イザヤ書 34 章 14 節の冒頭に、原典ヘブル語<ツィイム>と<イッイム>という似たような発音の語が対比をなして見られるが、いずれも動物名をさす語である。代表的な現代のイスパニア語の大半のもので、この二つの語に関連する部分は「<野猫>は<ハイエナ>に会い・・・」、「<山猫>は<ジャッカル>に会い・・・」などと訳されている。ところが、“La Biblia Latinoamérica” (Ediciones Paulinas, Verbo Divino, 1989)では、この箇所は「<野猫>と<ピューマ>が合流し・・・」と訳され、原語ヘブル語<イッイム>が<ピューマ>となっている。<ピューマ>は専らアメリカ大陸に生息する動物で、聖書の舞台となった中東地方、ユーラシア大陸には生息しなかったものである。

本書は、文語訳（1887 年）に始まる公用日本語訳聖書における動物名称の訳語の変遷を、聖書全体にわたって動物ごとに整理したものである。訳語を比較する公用日本語訳聖書として、文語訳（1887 年）、口語訳（1955 年）、新改訳（1970 年）、新共同訳（1987 年）、バルバロ訳（1980 年）を取り上げているが、適宜、英訳聖書 15 種、イスパニア語訳聖書 9 種、ヘブル語聖書 2 種、ギリシャ語聖書、ラテン語聖書各 1 種を参照している。なお本書の中では、ヘブル語、ギリシア語はすべてカタカナ表記している。年代、版を異にする聖書に描かれた動物名を追いかけるなかで、古代人が目にした動物のすがた、中世のヨーロッパの人々が想像した動物、現代人が考えている動物たちが、それぞれ異なったものかもしれないと考える次第である。

## 【自著紹介】

アメリコ・カストロ『セルバンテスの思想』（Américo Castro, *El pensamiento de Cervantes*, 本田誠二訳、法政大学出版局、2004）

本田 誠二（神田外語大学）

本書は二十世紀スペインを代表する知識人で、著名な歴史家・文芸批評家であったアメリコ・カストロ（1885-1972）の初期の著作『セルバンテスの思想』（1925, 1972）の翻訳である。アメリコ・カストロはこの書において、従来、大学教育を受けていないという意味の「無学」の才人（ingenio lego）として捉えられていたセルバンテスを、はじめて学問的・実証的に研究し、彼が実際は異教的なルネサンス思想に深く関与し、エラスムス主義の人文主義的教養を身につけた、モンテーニュ型のすぐれた教養人であったことを明らかにした。こうした見方は当時、きわめて斬新かつ衝撃的であり、第二共和制（1931）のスペインで大きな反響を呼んだが、内戦後のフランコ体制下では、概して否定的な反応を呼び覚ました（エラスムス主義が反カトリック的・異端的であったこと、セルバンテスの手法を「偽善的」と称したことなどが原因）。そのため、本書は入手のきわめて困難な「幻の名著」となるにいった。

著者が晩年にいたって、古い初版本（1925）の再版を決意したのは、そこに自らの思想の展開（エラスムス主義者から新キリスト教徒としてのセルバンテス解釈の転換）を踏まえた、新たな書き換えを行い、信頼の置ける別の研究者（J・ロドリゲス・プエルトラス）の注釈を加えて、全く新しい装いになしえたからである。著者自身のセルバンテス解釈も独自の歴史観が形成された 40 年余りの歳月のなかで大きく変化していったが、その間の絶えざるセルバンテス研究の成果（『葛藤の時代について』、『セルバンテスへ向けて』、『セルバンテスとスペイン生粋主義』）を初版に組み込んだ本書（第二版、1972）によって、古典的名著は、現代セルバンテス学の出発点としての意義をさらに強めることとなった。

本書を含むアメリコ・カストロの膨大な著作（論文・著書あわせて 500 点近い）は、その重要性に比して、わが国ではほとんど紹介されていないために、洞察力に富んだユニークな歴史観・文学観はおろか、その存在自体すらよく知られていない。従って初期の代表作である本書の翻訳出版をきっかけとして、わが国におけるアメリコ・カストロ研究にはずみがつくことが期待される。また後期の代表作である論争的な『歴史の中のスペイン』（1948）および、その改訂・改題した『スペインの歴史的現実』（1956）翻訳への、呼び水ともなりうるだろう。現在スペインで進行中の、アメリコ・カストロ集成（*Obra re*

unida 全6巻、トロツタ社、マドリード)の出版と併せて、日本でより本格的な紹介が待たれている。

今日ほど、アメリコ・カストロの歴史観が見直される必要があるときはないのではないか。というのもカストロはスペイン史における、キリスト教と共存したイスラム・ユダヤの知的遺産を正当かつ偏見なく評価することの必要性を、誰にもまして強く主張してきた学者だからである。宗教的対立と寛容というきわめて今日的な問題の解決に、大きなヒントを与えてくれる彼の視点は、異文化共存の可能性を強くわれわれに示唆している。

ダンテやシェイクスピアなどの<人と作品>研究は、優れたものが豊富にあるのに対して、セルバンテス研究の遅れは、ひとりわが国だけに見られる現象ではないとはいえ、その差は歴然としている(未だに『セルバンテス全集』を持たない)。広いスペイン語世界の象徴ともいべき文豪セルバンテスを、真の意味で理解するためには、全作品に即した正しい解釈が求められるが、それを可能な限り学問的・実証的に追求した本書は、わが国におけるセルバンテス研究のみならず、スペイン・ルネサンスへの知的接近をより深めるものになることはまちがいない。

### 【新刊紹介】

桜庭雅子『CD BOOK スペイン語会話パーフェクトブック』ベレ出版 2004

『隔週刊 世界遺産 DVD コレクション No.2 マチュ・ピチュ クスコ ガラパゴス』

デアゴスティーニ・ジャパン社 2004

藤倉利恵子『実用スペイン語 診療ガイド』東京経済 2004

マヌエル・デル・セーロ『スペイン語会話 クイックレファレンス』第三書房 2004

青木文夫、ビセンテ・アジャ、辻博子、マリア・エルナンデス

『スペイン人はこう話す!.. 気持ちを伝える視覚表現 150 ..』芸林書房

福岡教隆『スペイン語の贈り物』現代書館 2004

ラファエル・ラペサ『スペイン語の歴史』昭和堂 2004

リンカーン・クッシング監修『革命!キューバ★ポスター』

ブルース・インターアクションズ 2004

講談社編『ヨーロッパの世界遺産 (3) スペイン・ポルトガル』講談社+α文庫 2004

ミゲル・デリーベス『マリオとの五時間』彩流社 2004

伊高浩昭『ボスニアからスペインへ 戦の傷跡をたどる』論創社 2004

アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス『グッドラック』ポプラ社 2004

滝口鉄夫『スペイン・サンティアゴ巡礼の旅』論創社 2004

櫻井義夫『スペインのロマネスコ教会 時空を超えた光と影』鹿島出版会 200

マリオ・バルガス＝リョサ『フリオとシナリオライター』図書刊行会 2004

岩根國和『物語 スペインの歴史 人物篇 エル・シドからガウディまで』中公新書 2004

佐藤花那子『モロ人は馬にのって アンダルシアで舞い、耕し、生きる』

解放出版社 2004

坂東省治、戸門一衛、碓順治『現代スペイン情報ハンドブック』三修社 2004

渡辺哲郎『バスコとバスコ人』平凡社新書 2004

高垣敏博、西村君代、ルミ・タニ・モラターヤ『プログレッシブ単語帳 日本語から

引く知っておきたいスペイン語』小学館 2004

里中満知子・画『カルメン』中央公論社 2004

国本伊代編著『コスタリカを知るための55章』明石書店 2004

オリヴァー・サックス『オアハカ日誌 メキシコに広がるシダの楽園』早川書房 2004

細谷広美編著『ペルーを知るための62章』明石書店 2004

今井健策（ファンルーツ）『サッカーを愛する人のスペイン語』国際語学社 2004

本村和果『スペイン発 とまとの種』新風社 2004

寺崎秀樹教授退官記念論文集刊行委員会編『スペイン語学論集 寺崎秀樹教授退官記念』くろしお出版 2004

額賀信『観光革命 スペインに学ぶ地域活性化』日刊工業新聞社 2004

立石博高『スペイン歴史散歩 多文化多言語社会の明日に向けて』行路社 2004

### 【国際学会案内】

XI Coloquio Internacional de la Asociación de Cervantistas (XI · CIAC)

17 - 20 noviembre de 2004      lugar : Univ. Nacional de Seúl (Korea)

V Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas (AAH)

8 - 9 enero de 2005      lugar : Universidad Tamkang (Taipei, Taiwán)

### 【会員の移動】

#### 新入会員

赤木浩文（専修大学）、内田ゆかり（鳥取環境大学）、エアドー田口 やよい（海外）、OCHANDO BRUN Francisco（玉川大学）、加悦武（愛知海運・株）、CANAS Alberto（北陸大学）、GARRIDO DIAZ Luis Carlos（玉川大学）、GALLEGO ANDRADA Elena（上智大学）、濱松法子（海外、Univ. de Salamanca）、福地恭子（名桜大学）、松井潤（朝日新聞）、VICENTE Leticia（愛知県立大学）、RUBIO MARTIN Raquel（東京大学）、中西省三、福森雅史、木村健一（京都外国語大学）、QUINTERO Daniel（愛知県立大学）、近藤由佳（大阪外国語大学）、高野雅司（神戸市外国語大学）、土谷亮（神戸市外国語大学）、豊丸敦子（上智大学大学院生）、坂田彩（清泉女子大学大学院生）、ナカガワ マルガリータ（大阪外国語大学院生）、入江昌樹（日本大学大学院生）

#### 退会者

ARCE Germán、桑名一博、芝修身、中嶋平一郎、西脇エステラ、古川美奈子、松野道雄、松村マルセラ、渡辺通訓

### 【編集後記】

思いがけず学会理事の一員となり、6月の第1回理事会で広報担当を仰せつかりました。学会50周年記念大会プログラムが確定したのは、第2回理事会の10月3日。第8号『会報』の発送を「記念大会プログラム」送付の期日に合わせたかったのですが、慣れない未熟さから原稿依頼に手間取り、長い夏期休暇の影響をまろに受けてしまいました。会報のお届けが今日にまで遅れましたことお詫びいたします。これにこりず会員皆さまには、今後ともどしどしご寄稿いただきますようお願い申し上げます。

アテネオリンピック、台風の日本上陸数記録塗り替えや新潟県中越地震に伴う大被害、学会事務センター倒産、その他、めまぐるしく動いた2004年でした。（山崎信三）